

## 進化学より見たる哲学

加藤弘之

井上哲〔次郎〕博士が先頃心理学会で「哲学より見たる進化論」と云う題にて講演されたとのことで、それが哲学雑誌の第二十五卷第二百八十一号に掲載してある、それを讀で見ると余の意見とは全く反対であるから余は今回「進化学より見たる哲学」と云う題で聊か批評を試みたいと考えたのである、余は進化学も哲学も十分に知て居るのではないから井上博士の説を批評する採ないことは頗る大胆すぎたことで到底物にはなるまいと思う、予め此事を申述て置く。

ところが博士の講演は随分長いものであるから一席の演説に、それを委しく批評することは到底出来難い、仍て其要点と思う部分に就てのみ論ずる考であるが併ししかそれにしても又随分長い演説になるであろうと思われるのであるから務めて簡略にする考である。尤も博士の論説の概要を始めに挙げて、それから後に余の意見を述べるようにするよりも先ず博士の論説の中を一節宛切て挙げて毎節に余の批評を加えることにしようと思える、そこで博士は先ず左の如く述て居る。

井上博士曰、余は決して進化論を否定せぬのみならず、それを大に道理ある学説と考て居るのであるが併ししか惜いことには進化論は唯末の事のみを見て根本的の道理を忘れて居るようおに思われる点おが少なくない、然るに凡そ進化を説くには必ず先ず運動しんどうということをを説かねばならぬ、而して其運動を説くには必ず又其起因となるものがなければならぬのであるけれども、進化学は夫等の事を全く不問に付して少しも研究せぬのであるから其道理から考える

と進化論は決して哲理とはならぬのである、進化論では静的實在から動的現象の始めて生ずることも全く解らぬ、此静的實在なるものは哲学上種々の名目がある、仏教では真如実相と云いスピノーザ氏は本体 (Substanz) と云いカント氏は物如 (Ding an sich) と云うの類である、けれども進化学者には左様なものは少しも解らぬから唯々末の研究のみをして居て其本源には一向構わぬのである云々。

評者曰、宇宙には必ず一の静的實在なるものがあつて是れは微塵も動かぬものである、實在は不動であるが現象は動である抔と考えるのが抑の大謬見ではなからう乎と余は考えるのである、動静という反対の状態は古来学者に限らず一般に想像することであるけれども余の考うる所では眞の静なるものは絶無であつて静と見えるのは全く動の少ないのではない乎、宇宙万物皆恒に活動して居るのである、其外に唯一の静なる實在があるとは何分にも考えられぬではない乎、物理学の開けぬ時代には熱の反対に寒なるものがあると考えたのであるが、それは大なる間違で寒と認めるのは全く熱の少ないのであるということが解つたのであるが動静の反対的状态も矢張それと同じことではない乎、併し井上博士は實在は宇宙万物の一ではない全く宇宙の本源である、それゆゑ活動するものではないと言われる乎も知らぬが其主張の謬つて居ることは後に解るのである。

評者又曰、右の理を説くには先ず所謂實在即ち宇宙本体なるものから説き始めねばならぬのであるが井上博士に限らず凡て形而上学者と歟又は唯心哲学者と歟いう者は宇宙の本源として一種の小心靈を認める、尤も是れは必ずしも人格神の如き人間に類似した本体であるとしなくても必ず畢竟一種の絶大なる意思を有して居るものとなるのであつて是れが即ち全く静的實在である、カント氏の如きは人格神を信じたのであるけれどもショッペンハウエル氏の如きは左様なものは信ぜぬが併し宇宙の本体は意思であると認めたのであるからは亦矢張小心靈であつて畢竟する所は人格神と同様矢張不可思議的神秘的超自然的超越的のものになる、一層罵詈訛に云えば即ちお化となるのである。

評者又曰井上博士の静的實在なるものは決して人間らしき神と歎(か)仏と歎(か)でないことは能く解つて居る、或は支那で天と歎(か)上帝と歎(か)いうの類又は仏の真如実相という類である乎も知れぬ、併(しか)し兎に角左様な實在には必ず大意思大心靈があつて、それが宇宙を支配することになるのである、而して此大意思大心靈の力で以て始めて宇宙に現象が起るといふことになるのである、是れが即ち井上博士の哲理であると考えられる、けれども右の如き大意思大心靈たる實在なるものが始めて宇宙に現象を起すとすれば、其力は非常に大なる動ではあるまい乎、非常に大なる動力があるからこそ始めて宇宙の現象を起し得るのではあるまい乎、兎に角大意思と云い大心靈と云う言辭の上に明かに大動力の意味を顯して居るではない乎と余は疑うのである、果して然らば静的なる意義は如何に解してよき乎、余は甚だ惑うことである。

井上博士曰スペンサー氏は所謂「不可知」を説て宇宙の本体なるものは何である乎決して解らぬ、それは哲学の研究すべき領域でないというように説て居るが是は甚だ謬(まち)つたことであるけれども併(しか)しヘッケル氏に至ては決してそれどころのことではない、静的實在を全く輕蔑して居る、全く無いものとも言わぬけれども何の用をもなさぬものように論じて居る、それは左のヘッケル氏の文で解る、Was als „Ding an sich“ hinter der erkennbaren Erscheinungen steckt, das Wissen wir auch heute noch nicht. Aber was geht uns dieses mystische „Ding an sich“ überhaupt an, wenn wir keine Mittel zu seiner Erforschung besitzen, wenn wir nicht einmal klar wissen, ob es existiert oder nicht? ッケル氏の個様なる議論というものは全く實在を無視して居る、同氏は又宗教をも全く迷信として顧みないのであるが同氏を尊崇する加藤の如きも矢張(やは)り同様である、然るに宗教の古来今日迄存在して居るのは宇宙間には到底自然科学で解釈の出来ぬものがあるから、そこで宗教が必要になるのであつてスペンサー氏の如きも「不可知」を立てて宗教と科学とを調和することに努めたから多少道理が立つけれどもヘッケル氏に至ては左様なことさえぬのである云々。

評者曰、スペンサー氏は博士の論ぜられる如く宇宙の本体は何である乎、到底自然科学で解るものでないと認め

て「不可知」を立てて宗教と科学との調和を図つたのであるけれども此調和ということに就ては余は甚だ服せぬのであるが併し、それは別問題であるから今は論ぜぬこととして唯スペンサー氏が宇宙本体の如何は到底不可知であると断言したことに就ては少しく論じたい、それに就て論ずると余が宇宙本体と認めるものを論ずるに大に便宜を得ることになるからである、スペンサー氏は形而上学者でも又唯心学者でもない、全く経験学者であるから同氏の不可知論には固より大に取るべき所があるように感ぜられる、宇宙本体の性質にも又現象の性質にも今日迄人智で解釈の出来ぬことは夥多あるのであるが併し其中には到底不可解の事と今日未可解の事との別もあるであろう、けれども古代に於けるスピノーザ氏と今日に於けるヘッケル氏等とが宇宙本体と認定したるマテリアとエネルギーとの合一 (Einheit der Materie und Energie) が実に宇宙本体であるに相違ないとするだけのことは決して不都合のないことと余は考えるのである、余が何故左様に言う乎と云えば右マテリアとエネルギーとは始終変化はあつても其物それ自身は全く恒久的 (konstant) で絶て生滅のないものであるといふことは近世化学と物理学とで発見されたのである、即ち自然科学の経験上確証を得たことで決して想像説でも仮定説でもないのである、それが果して全く生滅のないものである以上は如何にしても、それを他造物であるとするこの出来ぬのは言う迄もないことと思ふ、それゆえ余は此マテリアとエネルギーとの合一を以て宇宙の本体とすることに就て聊も疑わぬのである、但し此説を抱く学者中に二派があつて一はマテリアを主としてエネルギーを属とし又一はエネルギーを主としてマテリアを属するのであつて甲は即ちホルバフ氏やビュフネル氏の唯物論であり乙はライプニッツ氏やオストワルド氏の Dynamismus 即ち Energetik (唯力論) とも訳すべき乎) であるが然るに此二派を共に非として一に偏せざる中央派とでも称すべきは即ち所謂 Hylozoismus (スピノーザ氏の説も此意味になるのであろうと思ふ) がヘッケル氏は確かに此説を取るのである、而して余も亦此派を是認したいと考える。

評者又曰若しも此マテリアとエネルギーとの合一を以て宇宙の本体とせぬときは本体と宇宙とは全く別物と

なつて宇宙は外物のために支配されることになる、宛かも神のために支配されるのと同じことである、ところがマテリーとエネルギーとの合一体を以て宇宙本体とするときには本体と宇宙とは全く一物となつて本体即ち宇宙、宇宙即ち本体と云うことになる、其点が即ち自然的と超自然的との分れる所以であると思う猶一寸茲に言わねばならぬことがある、博士はスピノーザ氏の本体を静的實在の一例に引いたけれどもスピノーザ氏の本体は唯今も述べた如く他学者の實在とは違い超自然的でなく全くマテリーとエネルギーとの合一体であるから此点は大に注目せねばならぬことと思う、一寸此事を断つて置く。

井上博士曰進化論は右の如く宇宙の實在抔には一向頓着なく唯動的現象界の事のみを主旨として研究するのであるから純形式的の真理に対しては何の解釈も出来ぬ、例えば二と二とが四となり三と三とが六となるというのが如きフォーミュラー抔は是れが如何に進化する乎、又論理の三原則の如きも決して進化するものでない、のみならず進化律それ自身が毫も進化せぬではない乎、凡て静止的真理に至ては進化抔いうことはない全く恒久不変である、又空間時間の如き是れが如何に進化する乎を聴きたい、加藤の如きは空間時間抔に就て何の考もないようである云云。評者曰凡そマテリーとエネルギーとは必ず進化するものと余は信ずるのであるが唯進化せぬものは自然法それ自身である、進化律は自然法の一部であるから、それゆえ進化すべきものでないのである、数学的フォーミュラーの如きは是れは全く自然法それ自身である、又論理の三原則の如きも矢張り同様自然法それ自身である、それゆえ固より進化すべきものではないのである、ところが空間時間であるが是れは自然法それ自身とは言えぬけれども併し是れはマテリーでもエネルギーでもない、それゆえ是れは進化せぬのである、進化するのは唯マテリーとエネルギーとのみであるということを知らねばならぬ。

井上博士曰スペンサー氏もヘッケル氏も其他の進化論者も凡て機械主義であるが是れは随分面白い点もある頗る痛快でもある、此主義では神が宇宙を造つたと歟又は神が宇宙の先き先き迄を見透して人間の運命を定めると歟い

う所謂目的主義を全然破壊するのであつて、それに代えるに自然淘汰性欲淘汰なる主義を以てして生物の生存競争に依り其勝敗が定まつて乃ち淘汰が出来るということを説くのであるから実に痛快である、けれども余は茲に一の疑問がある、凡て進化ということが全然一の目的なしに絶対機械的に出来るものであろう乎如何というに、其れは甚だ疑わしい、抑進化なるものが單純から複雑に移り無秩序から秩序に到るのであるとすれば此進化なるものが決して偶然の出来事でないことは明かであつて全く法則的に出来るのである、して見るとそこに自然と目的が立つて居るように考えられるではない乎、尤も決して神の立てたような目的ではないけれども必ず進化の方針が定まつて居るように思われるではない乎、進化は決して乱脈ではない必ず其道筋が定まつて居るに相違ないのである云云。

評者曰一定不易の法則即ち自然法で以て起る現象が決して盲目的でない偶然的でない、自然力は必ず斯くあるべき因があつて斯くあるべき果が生ずるのであるから、それゆえ宇宙の現象は宛かも初め目的を定めて其目的通りに出来るのと同じように見えるには相違ない、けれども初め目的を定めるといふ一の超自然力は絶てないのである、唯宛かも、それがあるのと同じような結果になるというに過ぎぬのであるから、それを目的法であるといふことは決して出来ぬ、矢張因果法とせねばならぬのである、茲に一の比喻を設けて説明して見ようならば古代にあつては地球が太陽を回ると思つて居る、然るに天文学の開けて、それは大なる謬で反対に地球が太陽を回るのであるといふことが解つた、けれども此の如き謬つた考も実際には余り不都合はない、矢張太陽が地球を回ると見て居ても、それで曆も出来れば又日月蝕も測れるのであるのであるが、学理上因果法であるものを謬て目的法と見て居ても、それは實際上余り不都合はないのである、けれども、それを学理上から考えれば太陽が地球を回るといふのと全く同様な謬見になるのである。

井上博士曰スペンサー氏は心理学原論中に超相的实在論(Transfigured Realism)なるものを挙げて其中に人間の

身体を外界と内界即ち客観と主観との中間にあるものと看做して主観的作用と客観的作用とに就て巧みに説て居るが、それを見ると人間の行動に一定の目的がある如く宇宙の作用にも一定の目的のある工合が能く似て居ると言うことが解る、尤も左様なることは先ず兎も角もしておいた所で尚言わねばならぬことがある、進化論は兎角現象界の表面のみを見るものであるから自然唯客観的になつて内界の事を忘れる弊が多いのであるが、それではいかぬ十分主観的に研究するようになれば自然的現象が決して単に機械的でなく大に目的の存して居るものであるということが解らねばならぬと思う、そこに余は大なる疑があるのである云々。

評者曰是れは前段の批評で最早尽して居ると思うけれども併し猶少く論ずるであろう、スペンサー氏の内界外界主観客観論も固より多少の道理があるろう、又博士が進化論は兎角外界の客観的研究を主として内界の主観的研究を怠ると非難する論も多少道理がないとは言えぬ、けれども従来の哲学は殆ど全く外界客観を怠て唯唯内界主観のみ旨として居るのであるから遂に実験実証ということを軽視し其結果殆ど荒誕無稽に陥るようになる、所ろが進化的哲学になると専ら実験実証に依て研究するのを旨とするから自ら外界の客観的研究が先きにならねばならぬ、若し左様なる手続を踏まねば決して内界の主観的研究に移る方法手段がないからである、是れは当然已むを得ない手続である、例えば二階三階の模様を窺わんとするには何としても必ず梯子を登つて行かねば其模様が委しく解るものでない、是れは実に已むを得ぬ手続である、ところが従来の哲学は決して左様なる手続を取らず唯下座敷から二階三階を覗いて見て勝手な臆測をして居るのであるが余輩自然論者は決して左様なる危険なことはせぬ、必ず二階三階と順次に登て其実況を目撃しようとして骨折て居るのである、けれども、それは随分骨の折れることで容易に充分なる成效を見る訳にはゆかぬのである。

評者又曰右の如く一心一向やつて居る結果として近来は漸次骨折の功が顯われて来て大分楽になつた、けれども前途猶遼遠で容易なことでない、恐らく幾星霜を経たとて到底全く二階三階に登り切ることが出来ぬかも知れぬ、

ところが従来の哲学者になると左様な心配は少しもない梯子を登ろうと思うようなことには氣附かず唯平然下座敷に居て二階三階の事を全く見て来たように法螺吹て居るのであるから氣楽なものである、唯法螺で以つて靜的實在だと歟運動だと歟目的法だと歟言つたところで決して信用の出来べきものでない、余輩進化学者は決して左様な形而上学的認識で以つて満足することは出来ぬ、今日となつては最早必ず所謂生物学の認識でなければ到底用立つべきものでないと思う、ところが従来の哲学者は多くは左様なことを知らずして唯一心一向内界主觀の臆測のみに骨を折て居るのであるが、それは實に夢を見て居るようなものである、夢では實に仕様のない話であると考ええる。

井上博士曰以上論ずるようにな進化学論は専ら外界の方からのみ見て居るから其余儀なき結果として全く機械論に陥るようになる、凡そ生存競争は全く力次第である、強いものが勝ち弱いものが負けるといふことであるから其勝敗を神が前以て定めるのではないとするので、それは實に其通りに相違ない、が併し其競争なるものに就ては先ず以て意思というものに就て十分考えることが甚だ必要なる條件であると思う、例えば二頭の虎が一片の肉を争うと假想すると先ず其肉を己れに取らんとする意思が双方に生ぜねばならぬ、決して唯機械的に肉を争うのではない、そこで其意思の争となるのであるが其結果は強弱に依て定まるのである、但し虎の如き動物に就て意思抔といえ少しく高すぎるけれども人間に就て言えば其点は明かである、左様な理由であるから生存競争の裏面には必ず意思がなければならぬ、若しも意思がなかつたならば生存競争の起るべき道理は決してないのである、余は以前ショッペンハウエル氏の著 *Ueber den Willen in der Natur* を讀んだことがあるが其意思論は蓋し仏教や波羅門から来た者であろうと思う、兎に角ショッペンハウエル氏以前には万物發展の淵源を意思に置いた学者は西洋にはなかつたのであるのに同氏は此の如く意思を以て万物發展の本源とする論を立てた、實に真理である、ところがダーキン氏の著 *On the Origin of Species* には意思論はない、是れは必ず意思論を以て補わねばならぬ、必ず先ず意思論がなくては到底進化学論は立たぬのである。



井上博士又曰く右様な訳で意思なるものは根本的活力になるのであるのに進化論は其大切なるものを忘れて居るのである、一体吾々の眼耳杯なまじの出来たというのも全く意思が土台となつたのではない乎、近頃の生物学者の考では仍なお未だ眼耳杯なまじの具わらぬ最下等動物は本来表皮(Oberhaut)で見もし聞きもしたのであるに、それが次第に進化発展して特別に眼耳杯なまじの如き機関が出来るようになったことであるがそれは必ず意思の働きに外ならぬことと思ふ、往昔印度の行者に始終手を差上げて居て、それを神に捧げたいと思つたところが其手が後には全く肉が落ち枯木のようになつてしまつたという話があるが是れも全く強い意思の力である、其様な訳で意思というものは必ず生存競争の活力とならねばならぬものと信ぜざるを得ぬのである云々。

評者曰博士は生存競争を説くには必ず先ず意思の事を説かねばならぬ、意思がなければ決して競争の起るものではないと述べて二頭の虎の例を引かれ且つシヨッペンハウエル氏の如きは其著書に意思なるものが万物発展の根本活力となる所以ゆゑんを論じたがダーキン氏の著書には意思の事は少しもない、けれども是れは必ず意思論で補わねばならぬと論ぜられたのであるが意思なるものが生存競争を惹起する活力であるということは無論のことである、全く尤もつともなる論と思ふ、但し意思といへば蓋し高等動物以下には言えぬことで其以下には仍なお動向(Trieb oder Neigung)と称せねばならぬと考えるのであるが倅然さてしからば意思と動向とは如何なる相違である乎かというに植物や下等動物にあつて仍なお無意識的に発動する者と、又人間及び其他の高等動物にあつて多少意識的に発動する者との間には、即ち意識の有無という相違があるからである、尤もつともも高等動物にも意識的発動の外に又無意識発動もあるから、それは無論唯動向と称せねばならぬのである、右様な訳であるから、意思なるものはそれは全く動向の進化したものであつて唯特に人間及び其他の高等動物に就てのみ言うべきものであると思ふ、然しかるにシヨッペンハウエル氏の如きは啻ただに万物に就て意思を説くのみならず更に宇宙の本源(Weltgrund)を以て直に意思と認めたのである、即ち宇宙それ自身が既に大意思であると認めて居るのである、尤もつともも其大意思は理性を具せざる大意思であるとして居るの

である。

評者又曰此の如く宇宙の本源が假令理性を具せざる大意思であるにしても苟くも既に意思である以上は必ず先ず意識的目的を有して居らねばならぬことになる、前述の如く意思には必ず意識的発動がなければならぬからである、随つて又宇宙本源が遂に超自然的神秘的だ心霊的のものとなるのは当然のことである、博士がシヨッペンハウエル氏に就いて歎称せられるのは最も其点にあるのであるけれども余のそれを首肯することの出来ぬのも亦其点にあるのである、又近来米国で頓に盛になつた彼のプラグマチスムスの如きは自然界と精神界とを全く同一視してエネルギーを以て直に意思と認め随て自然界の現象をも凡て目的的に出来るものとするのであるが是れは甚だ謬つて居ると思う、尤も意思がエネルギーであることは無論なれども併しエネルギー即意思という様に言うことは出来ぬ、意思とはエネルギーの進化発展した部分に限るのは前述の通りである、プラグマチスムスが自然界と精神界とを別世界視せず全く同一世界であるとするのは余輩の最も是認する所であるけれども唯自然界と精神界との間に殆ど進化発展の程度を許さぬのは又余輩の取らざる所である、のみならず此学派は此点に於てシヨッペンハウエル氏と殆ど一致することになつて遂に宇宙の本源にも大意思なるだ心霊を認めることになるのであるから此点は余輩の最も服する能わざる所である、但し後席に於ける井上博士の「シヨッペンハウエルとジームス」なる講演には必ず意思に就て右両氏の一致する所以を説かれることであらうと思う、然るに余は宇宙を以て絶対自然的絶対因果的と認めて毫末も宇宙意思(Weltwille)なる超自然的神秘的なる意思を認許せぬからである、けれども余は余の自ら宇宙本体と認める所のマテリーとエネルギーとの合一点にも最先から既に必ず動向が存して居るものと認める、併し意思ではない、猶未だ意思に迄進化して居るものでないから是れは必ず無意識的でなければならぬ、未だ毫も意識的目的を有したものでないのである、然るに一般哲学者は兎角宇宙本体即ち実在を以て終始絶対的高遠完全にして実に言語に絶したるものとするのであるけれども余は宇宙本体を以て最も未進化未発展の状態より漸次に進

化発展するもので殆ど其止まる所を知らざる程のものではなからう乎と考えるのである。

評者又曰余輩がマテリーとエネルギーとの合一体とする所の宇宙本体は全宇宙即ち諸天体に通じて皆同一にして此合一体が諸天体の成立を営むのであるから決して諸天体の上にも又其外にも存在するものではないのであるが此宇宙本体は始め天体成立の際には仍お頼る未進化未発展の状態であるけれども、それより絶えず進化発展して遂に又其天体の滅絶に至り消散し更に親天体の成立を営むことになるのである、凡そ此空間には無類の天体が終始交々生滅長消して居るのであるから宇宙本体の変化は無始無終に行われつつあるも本体それ自身は終始恒存して居るのであると思う、而して其変化が自然法即ち因果法に支配されて起る所の現象であると余は信するのである、果して然らば此宇宙本体が即ち實在（最も活動的の）にして此外に絶て靜的實在なるものの存すべき道理を発見することは出来ぬのであらうと考える。

評者又曰、ところが所謂靜的實在なるものに至つては抑それが如何なるものである乎、全く其の物柄が解らぬ、実に空空寂寂捕捉すべからざるものである、果して然らば此靜的實在なるものも亦所謂神と一般遂に化物たらざるを得ぬことになるのである、形而上学者と余輩自然論者との宇宙觀は此の如く表裏反對であるから到底如何ともする能わぬことであると思う、又博士はシュッペンハウエル氏は意思を以て万物発展の渊源としたのに反してダーキン氏の著書には意思の事を少しも論じて居らぬが意思を不問に付して生存競争を説くことは甚だ間違つたことであると論じて居る、成程右の著書には意思の事に就て特に論じて居らぬようである、けれども其論説を翫味して見れば有機体に動向又は意思の存して居て、それが生存競争の誘因となるということは自然に解るのである、又最後の著書「The descent of man」にも矢張意思に就て特に章條を設けて説いてはないけれども此書の方では猶更意思の必要なことが自ら解るのである、決して動向や意思を忘れて居るとは思われぬ、又博士が動物に眼耳杯の生じたこと及び印度の行者が手を神に捧げること等のことは全く意思の発動に原因したということを述べられたがそれは多少道理の

あることと思われる、それゆえ余は博士が意思を生存競争上甚だ必要のものとするのを決して非難するのではない、けれども唯博士がショッペンハウエル氏と同様に宇宙意思なるものを主張するのに就ては大に反対せねばならぬ、余は意思なるものを以て全く動向の進化したもので高等動物及び人間に至て始めて生じたものであるという理由を明かにするために右の如く論じて来たのである。

井上博士曰ウント氏も意思に就て論じてスペンサー氏やヘッケル氏の欠陥を示して居る、ウント氏の説は箇様である、凡そ生存競争ということに就ては二つに分けて見ねばならぬ点がある、其第一は境遇例えば自己の属する国土、時世、周囲の状態等であるが是れは吾々の意思で以て何とも左右することの出来ぬものである、併し是等の境遇なるものを除けば其他は全く自己の意思で生存競争が定まる、というのであるが即ち第二になるのであるが、是れは実に尤なる議論である、日本が清露両国に打勝つたのも日本人の意思が予め打勝つべき準備をして居たからである、東郷大将が敵艦を全滅せしめたのも大将に壮大なる意思があったからである、其様な訳で意思がなければ競争に打勝つことは決して出来ぬ、ウント氏は殊にショッペンハウエル氏の影響を受けて右様な説を立てたのであると思う、其他パウルゼン氏も矢張同様に論じて居る、進化論には必ず意思を加えて研究せねばならぬ、左様にすれば進化論が大に變化して来る云々。

評者曰ウント氏も井上博士も皆自由意思論者（蓋し有限的）であるところから自然右様な説が一致すると見える、けれども余輩自然論者は人間にも他動物同様に身心共に自由ということを微塵も認許することは出来ぬ、人間も他動物から進化したのである以上独り人間のみに自由意思がある採（な）う道理のある筈がない、独り人間のみに有有限的意思がある採（な）うのは大なる謬見である、博士はウント氏を賛して自己の属する国土、時世並に四圍の状況等の如き凡て自己が関係する境遇の事は吾々の自由意思で以て如何とも左右することは出来ぬけれども其他の事に至ては凡て自由（すべ）に左右することが出来ると論じ吾邦の対清対露の大勝や東郷大将の露艦全滅採（な）うの例を挙げて説

て居るけれども余は甚だ其理由を解することに困むのである、余輩不自由意思論者は右の如く人間にも身心ともに微塵も自由はないとするのであるから意思の起るのも全く已むを得ざる動機が原因となるのに外ならぬとする、而して其已むを得ざる動機は如何に生ずる乎というに是れは一には父祖の種々の遺伝と又一には自己が外界の状況(博士が国土、時世、周囲の状態等と言える類なり)に応化することに依て生ずるのである、それゆえ意思が決して自由に起るものでなきのみならず其意思を産み出す動機も亦同く已むを得ざる理由から生ずるのである。

評者又曰然るに自由意思論者が意思を自由なるものと考えるのは全く選択の自由 (Wahlfreiheit) というものがあると信ずるからのことである、物事を考て、こうしよう乎、ああしよう乎、と思ふとき、又やるがよからう乎、やめるがよからう乎と惑うとき杯に遂に何れに歟決定するようになると、それを自分が自由に選択決定したのであるように思ふのであるけれども、是れが大なる謬見である、決して自分が自由に選択決定したのではない、実は自分の精神内に同一時に二個若くは数個の相反対する意思が存して居て、それが先ず互に勝を占めんと競争するのである、而して其中で強い意思が弱い意思を打負かすので、そこで意思の決定がつくのである、自分が自由に選択決定するのではなくて意思相互の勝敗で決定が出来るのである、然るに左様なる理由が解らぬところからして全く自分で自由に選択決定するもののように思ふのであるから実に甚だしき謬見になるのである、其様なる訳であるから日清日露の両大戦に吾邦が大勝を得たのも東郷大将が露艦を全滅せしめたのも、それは固より其意思の壮大なるに原因するのであるけれども併し其意思は決して自由に起したのではなく必ず日本人の優勝なる遺伝と境遇応化とから生じた所の動機から出たのであるということを知らぬばならぬ、尤も此意思不自由論に就ては猶十分論じたいことがあるけれども先ず是れで差措くであろう、是れで大抵は解つたことと思ふ。

井上博士曰余は猶意思に就て言わねばならぬことがある、是れは心理学に關係したことであるから心理学の方面から疑のある諸君には意見を吐露して貰いたいと思ふのである、意思論に就て一つ解り難いことがある、吾等の生

命は先ず生存するということを一として居る、そこで生存して行かねばならぬ、けれども生存して居るから生存の欲望があるのであるが、ところが何故に生存せねばならぬ乎と不明になる、何故ということに対しては必ず不明なものが出て来る、茲に生命の問題なるものが出て来る、青年杯になると煩悶するというようなことも随分ある、又食うことも同様である、何故食わねばならぬ乎、旨いから食うと云うであらうけれども尚一つ先きにゆくと何故旨いものを食わねばならぬ乎、箇様に段段と押してゆくと仕舞に何等歟必ず残る、左様に先きに先にと押詰めてゆくとしても決して其終点に達することは出来ぬ、ところで、それには必ず何か訳があると思う、尚今一つ、それに関連して居ることがあるが意思に就ては自分の勝手にならぬことがある、即ち前述の自己の境遇のことやら又は人間として自然というものの為めに何としても余儀なくされる、それに就てはハルトマン氏杯は無意識哲学 (Philosophie des Unbewußten) の中に叙述して居る、自分では左様にせずとも、よいと思つても自然と衝動 (Drang) が出てやらしてしまう、又尚一つ自分一身で如何ともすることの出来ぬものがある、それは如何なる訳乎というに一体意思というものは動向から出て来る、是は心理学者も大抵左様に言つて居るのであるが元来意思なるものは感情若くは知識とは違て大に肉体の働が加わつて居るからの訳からである、知でも情でも多少生理的変化を伴つては居るけれども決して意思が生理的關係を持って居る程ではない、意思は肉体が働かねば意思にはならぬ、唯しようとした丈けでは未だ意思ではない、ところが動向も矢張肉体的活動を伴つて居る、決して単に心理的作用のみでない、それゆへヘルバルト氏の如きは動向は心理的作用というよりも寧ろ生理的作用という方がよいと述べて居る。

井上博士又曰動向は必ず筋肉の活動を伴うて居る、のみならず必ず目的がある、けれども、それが明確でない、それが明確になれば既に意思になるのである、ところで此動向なるものは抑何である乎という哲学的に言えば即ち活動である、宇宙の活動である、宇宙の活動が有機体にあつては欲動 (Trieb) となる、而して、それが知情の発展と伴つて遂に意思となる、一寸図にして見れば此の如くである、即ち

筒様になるのであるから宇宙全体の活動が動物にあつては欲動となるが植物にあつては仍お嚮動である、けれども高等動物から人間になつては既に意思となる、是れが順序である、蓋し宇宙は一大活動力を以て変化を現して居る、其活動の法則が即ち進化律である云云。

評者曰博士は何故に生存せねばならぬ乎何故に食わねばならぬ乎という問題を出し、それより段段と押し詰めてゆくと遂に解らぬものが必ず残る決して終点迄達することは出来ぬと述べられたのであるが是れは蓋し所謂静的実在の不可解を説かれたのでもあろう乎、換言すれば宇宙の大目的大意思大心靈とも云うべき終極点を指されたのであろう乎とも考えられるのであるけれども、併し余輩自然論者は決して左様な問題を必要とはせぬのである、余輩自然論者は凡そ宇宙の成立から万物の生滅長消即ち凡百の現象を以て畢竟之を自然力因果力の然らしむる所に帰するものとして毫末も宇宙の大意思大心靈を認めぬのであるから博士の提出せる大問題の如きは全く不問に付して敢て意とせぬのである、自然から生命を受たる吾々人間が此生命を務めて保持せんとするのは其本性である、けれども食わねば餓死するそれゆえ食うのである、旨いものを食うのが生命保全の上に於て愉快であるから食うのである、併し何故旨い乎何故愉快である乎という道理を究めんとするならば、それは蓋し生理学若くは其他の自然科学の問題であつて決して哲学上の問題ではないのである、又博士の例に引かれたハルトマン氏の「無意識の哲理」論中吾々の意思に反する衝動なるものがあつて自ら為さんとすることをさせず却て好まぬことをさせるようになる場合があるとの論は尤なことである是れが即ち余の前に述べた意思不自由の証拠になるのである即ち博士の自由意思論とは反対になるのである、それから次に博士の述べられた活動、欲動、嚮動、意思の解釈並に其図式の如きは大抵異論もないが併し宇宙の活動ということに就ては博士の考とは大に異なつて居る、博士は先ず宇宙に大活動があつて、それから欲動、嚮動、意思杯が出て来るように見られるのであるけれども余の論では宇宙本体たるマテリーと

エネルギーとの合一体の最初の活動は猶なほ小なるもので、之れが漸次進化發展して、嚮動、欲動、意思となつて来るのである、更に約述して見れば博士の論では大活動から小活動が出るのであるけれども余の所見では小活動が次第に大活動に進化して来るということになるのである、併しかし茲に一つ笑おかしいことがある、博士はショッペンハウエル氏の説を取て宇宙の意思なるものを説かれたのであるのに図式で見ると意思なるものは高等動物や人間に至て始めて生ずるもので其以前には無いようにも思われる、是れは抑おさ如何なる訳であらう乎か、甚だ解し難いのである。

井上博士曰そこで右嚮動、欲動、意思など杯などいうものは宇宙の活動から出て来るものであつて此活動には必ず一定の方針がある、而して万物が、それで律せられる人間も同様である、然るに唯そのみに依て律せられ居るときには未だ個人の自我というものが無い、人間も単に自然界の一部をなして居るのみである、ところが個人の自我というものの出来るのは唯意思の發達に依るのである、凡そ意思なるものは進で努力するということも出来れば又退て制止することも出来る、そこに始めて自我なるものが現れて来る、唯宇宙の活動に依て律せられるのみでは未だ自我はない、唯自然界の一部である、本来自然界の一部であるものが漸次知情の發達に伴つて意思が茲に發展して来たときには自分で自分を制止したり又努力して何事歟かを成し遂げたり杯などする、それだけの範圍に自我が出来る、それゆえ自我は実に小なるものであるのみならず其自我が出来て居ても決して自分の思う通りになる訳ではない、矢張宇宙の趨勢に制せられる、そこに不可解のものがある、何故左様なものがある乎かということとは到底個人の地位からは廻はるかに超絶した大問題である、但し意思と雖一層広汎なる所から言へば宇宙の活動の制裁の範圍に入らぬことはない、矢張自然の制裁の範圍に入て来るけれども併しかし少し區別がある、又意思には動機が種々生じて、それが互に競争するというようなこともある、尤是等の事を唯今詳述することは時間が許さぬ云々。

評者曰博士は嚮動欲動意思は必ず宇宙の活動から出て来るもので、それには又必ず一定の方針があるのであつて万物はそれに律せられるけれども唯人間のみに、それに律せられぬ力が生じて来た、それが即ち自我なるもので



ある云々と論ぜられたのであるが此点が余輩自然論者の最も首肯の出来ぬことである、前にも述べた如く博士はウント氏等と同じく所謂有机的自由意思論者であるから左様なることを説かれるのであるけれども人間が如何に進化したとて矢張有機体である、此後猶千萬年を経て今より千万倍の進化を遂げ得るとして見ても猶矢張有機体の域を脱することの出来るものでない、仏教では人間も仏になり得る杯なごいふけれども仮令たし仏になつたとて矢張人間である、有機体であり人間である者が未来永劫人間以上の超絶意思力を獲得すべき筈がない、但し無機体から有機体が生じた如く千万年の後に或は人間が有機体以上のものになることがある乎も知れぬと考て見たところで、それでも矢張自然的産物であるに相違ない、果して自然的産物であれば、之れが一に自然法に依て律せられるのは固より言う迄もなきことである、ギエーテ氏は万古不易の真理を吐露した、吾々は一に万占不易の金剛大法に支配されて吾々の生存境界を成就することに余儀なくされて居ると、如何なる哲理も敢て之に敵することは出来ぬと思う、して見れば自我杯言つたとしても、之れは全く無意義のものに過ぎぬ。

評者又曰然るに古來哲学者が右の如き大謬見に陥つたというのには必ず多少の理由が存するのである、人間は他動物の全然自然力に制せられるのと異なつて却て大に自然力を制するが如き趣がある、今日の開化に際して其最も顯著なるものを一二挙示して見れば蒸氣事業電気事業又は近來の飛行器の計画の如きに至ては是れは実に人間が全く自然力を制し得るものと見て毫も不都合はないように思われるけれども、それは唯左様に思われるのみであつて決して真に左様であるのではない、何故乎かというに之れは人間には他動物の未だ獲得せなんだ所の大知識を獲得したために遂に自然法の如何なるもの乎を知ることが出来るようになって、それで其自然法を自ら利用することを得るに至つたからのことである、して見ると人間が今日の如き開化に迄進で蒸氣電気又は飛行器の如き大發明をなすに至るのも是れは決して人間が自然を制するのではなくて矢張自然に制せられて居るのである、換言すれば自然法に遵從して以て自然法を利用することを得るようになった迄のことである、それゆえ毫末も自然法の束縛を脱して

自由に所思を遂げる採ないうことではないのである、其他凡すべて精神上の事に至ても全く同一様であつて到底微塵も自由意思のあるべきものではない、果して微塵も自由意思のない以上は又微塵も自我なるもののあるべき筈はない、唯知識に於て他動物に超越したただけのことである、それゆえ矢張唯絶対的自然力の奴隷であると認めねばならぬのである。

評者又曰ところが博士も亦自我は至て小なるものであつて多くは矢張宇宙の趨勢に制せられて居ると述べて偕さてここに不可解の点があるとせられるのであるが是れが博士も亦大に自然力の大なる所以ゆえんを悟られてるのである、而して其不可解の点は到底個人の地位からは迥はるかに超絶して居る問題とせられるのであるが、それは蓋し彼の宇宙の静的實在なる神変不可思議の太心靈に帰せられるのであろうけれども余輩は決して左様なことで満足することは出来ぬ、余輩は出来得る限りは矢張科学的に研究せねばならぬことと信ずる、併しかし又それ歟かと思つと博士は更に一層広汎なる所から言えば宇宙の活動の制裁の範囲に入らぬことはないとも言い又それとも少し区別があるとも言い又意思の動機が互に競争するとも言い種々に言い回わされる所を見ると博士の主義は頗すこぶる曖昧となつて殆ど解らぬことになるのである。

井上博士曰以上段々論じ来つたような訳であるから進化論に就ては必ず先ず意思というものを必要條件として研究せねば十分でない、此意思というものの側から行くと即ち目的ということになる人間も動物も植物も皆目的的に働くのである、人間の道德の事でも凡すべて意思が目的的に働くので完全に達するのである、凡すべて目的なしの行為というものは狂者の外にはない、而して其目的は必ず宇宙の活動から出て来るのである、哲学では必ず左様に論究せねばならぬ、そこが即ち哲学の必要なる所である云々。

評者曰宇宙の現象が凡すべて因果的機械的であるは言う迄もなければ、其結果から見ると宛あたかも既に目的があつて出来たように見えるのであるということに就ては段々論じ来つた通りであるから最早繰返すにも及ぶまいと考える

のであるが併し高等動物及び人間に至ては意識上明かに目的がある、是れは目的と称して不都合はない、けれども是れとても実は自個の自由なる意思で自由に目的を立てるのでは決してない、意思が必ず因果的機械的に出て来るにも拘わらず、それが意識的であるから其目指す点が明瞭になつて居る、それで、それを目的と称してもよいのである、けれども矢張全く因果的機械的に出て来る目的で決して吾々が自由に立て得る目的でないことは言う迄もないのである。

評者又曰儲是れにて批評は大略結了したと思うのであるが之を要するに博士の意は進化論に於て最も必要條件として居るものは生存競争ということであるけれども生存競争なるものは抑末の事であつて生存競争を説くには先ず宇宙の静的實在から宇宙の大活動又宇宙の意思の如き大本源に遡て研究せねばならぬことであるのに進化論者は左様なることは凡て全く不問に付して居るのであるから進化論は到底哲理となるものではないといふのである、然るに余輩自然論者から見ると抑宇宙の静的實在なるものは到底信憑すべき実証の存するものでない、又宇宙の大活動宇宙の大意思なるものも同様全く臆測に外ならぬもので概して不可思議的神秘的超自然的化物的の力を想像するに過ぎぬ、然るに宇宙は決して左様なものでない、却て絶対自然的に絶対因果的にマテリーとエネルギーとの合一の進化発展であるから宇宙の現象は一に進化の理に依て研究するにあらざれば到底真理に到達することは出来ぬと断定するのである、約述すれば将来の哲学は必ず進化学的でなければならぬとするのである。

評者又曰ところが先頃来所謂千里眼なるものが透覚をなしたことに就て諸学者間にも種々の説が出て其中でも井上博士の如きは右は到底哲学若くは宗教的問題であつて自然科学杯で研究の出来るものでないと言われたように聞くのである、若し果して左様であれば博士の主張される不可思議的なる神秘的なる超自然的なる大意思大心靈若くは静的實在の領域に入り込んで研究せねばならぬ訳であるけれども余は何分にも、それに服することが出来ぬ、尤も余とても何の考もつかぬのであるけれども右等の頗る罕れなる珍現象は或は所謂 (Atavismen) (余は訳字を知ら

ねども再現又は復現と訳してよからん）の類で人間の祖先なる動物時代に於ける視覚の復現したのであるまい乎と臆測するのであるが是れは全く臆測に止まるのであるから決して主張するのではないけれども併し兎に角此の如きことは決して人間界に就てのみ研究すべきものでなくて必ず動物界に迄研究を及ばさねば到底解らぬことではなからう乎と考えるのであるから序ながら一寸述べて置く、倅非常に長談議となつたことであるに井上博士を始め諸君の清聴を辱くしたのは余の栄誉とする所である。

（明治四十三年十一月「哲学雑誌」第二八五号）

- 『明治文学全集』第八〇巻「明治哲学思想集」（筑摩書房、一九七四（昭和四九）年）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。